

週刊 武四郎

第41号

2019年(平成31年)1月16日(水)
発行・松阪市

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
についてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

幕末の志士武四郎

松浦武四郎さんの人生には、まさに「志士の時代」というような時期があります。幕末のあの時期、松浦武四郎の名は「蝦夷通の志士」として、天下国家を語る人々の間ではよく知られていた存在だったのです。

最初に武四郎さんの存在に注目したのは水戸藩でした。当時、水戸藩には思想家としても著名な藤田東湖がいました。東湖は、「松浦武四郎、天下の奇男児に御座候」と、武四郎に会った時の印象を知人への手紙に記しています。

また、二度目の蝦夷地探検の際、江差で武四郎さんは京都から旅してきた頼三樹三郎に出会います(詳細は五号に)。当時の江差は都から流れてきた人々の吹きだまりでもありました。黒船が浦賀に來航した時、

ちょうど江戸にいた武四郎さんの元には吉田松陰が訪ねてきました。二人の出会い、この時が初めてだったようです。日本の鎖国を解こうと諸外国が虎視眈々と狙っていることは、幕閣の重鎮から地方の志士まで薄々感じていたことではありましたが、太平洋を渡ってアメリカが来た現実、世間は上も下も大騒ぎになりました。

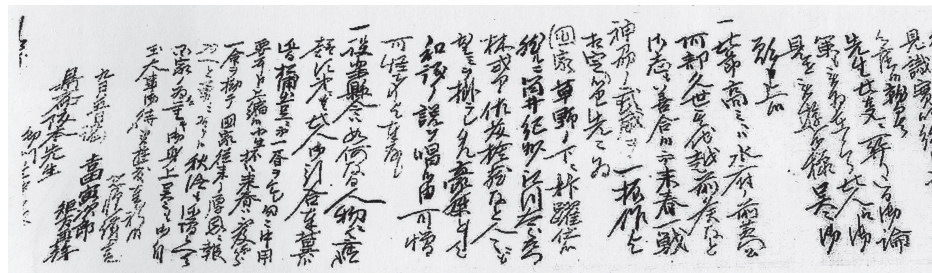
「次はロシアが来るのでは」という危機感を持った人々は、みなこぞって蝦夷通の武四郎さんの話を聴きに來ました。松陰もその一人であったのです。

「松浦武四郎、奇人なり」と、松陰は書いています(奇人というのは「ユニークな人」という意味で使っているようです)。

しかし、武四郎さんが幕府の

役人として蝦夷地に赴いているその時に、時の大老井伊直弼によって藤田東湖たちは蟄居させられ、そしてのちには縛に就いた松陰も三樹三郎も処刑さ

れてしまいます。世にいう「安政の大獄」です。武四郎さんはその時、「もし、自分が江戸にいたら連座させられていたに違いない」と思いました。そこから急に政治の表舞台から距離を置いて、探検家、文筆家としての活動に力を入れるようになるのです。こうした激動の時代、人の生と死は本当に紙一重でした。結果として武四郎さんは用心深く生き延びたということになります。



▲「吉田松陰書簡」(「灰心余赤」所収) 吉田松陰 嘉永6年(1853)

この年、6月にアメリカのペリーが、7月にロシアのプチャーチンが來航すると、36歳だった武四郎は志士たちから頼まれ、攘夷の勅令を求める密書と、志士たちの海防に関わる献策を携え、京都の朝廷へと届けている。その際、松陰から大阪の砲術家坂本鼎齋に会うように勧められ、紹介状を書いてくれたが、文中には「幕府の腰拔武士が……」と、開国を論ずる幕府内の動きを痛烈に批判している。武四郎は鼎齋のもとを訪ねたが留守で会うことができなかったため、この手紙は武四郎の手元に残された。(松浦武四郎記念館蔵)

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなる「北加伊道」を含む6案を政府に提案したことから「北海道の名付け親」と称される。

文・河治和香

装画・りんたろう

編集・細山田正人

デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

